

生きる

観賞日 2024年2月26日 上映時間 143分

【概要】

制作 1952年 東宝

監督 黒澤明

脚本 橋本忍、小国英雄、黒澤明

音楽 早坂文雄

撮影 中井朝一

出演 志村喬(渡辺勤治)、金子信雄(渡辺光男)、小田切みき(小田切とよ)

伊藤雄之助(小説家)、中村伸郎(市役所助役)、藤原釜足(大野)、関京子(光男の妻)



【あらすじ】

市役所市民課長の渡辺勤治が欠勤した。市民課は市民と市役所を直接結ぶ窓口として新設された課。課長の渡辺は後1カ月で勤続30年間無欠勤の記録を達成するところであった。仕事を休んだ渡辺が向かった先は病院。検査の結果下された診断は初期の胃潰瘍。しかし、渡辺は手遅れの胃癌であると直感した。大分前に妻を亡くした渡辺は息子夫婦と暮らしていたが、今やその息子夫婦にも煙たがられる存在。自暴自棄になった渡辺は役所にも出勤せず夜の巷を徘徊し、そこで小説家に出会う。小説家は渡辺に人生を楽しめと説くが、快樂をもってしても渡辺の心は晴れない。ある日、市民課の若い女性事務員小田切が訪ねて来て、渡辺は小田切に終日付き合ってもらおう。しかし、度重なる誘いに小田切は辟易、あるヒントを渡辺に与える。5か月後、渡辺の通夜の席。市役所の関係者が集合。そこに、新しく整備された公園の近隣住民が恩人の渡辺を悼み駆けつけてくる。ミイラとあだ名された小役人渡辺を豹変させたものは何だったのか？役所の縄張り意識を超えて公園建設を成し遂げた渡辺の熱意の源は？通夜の席で明かされる真実。

お役所仕事を痛烈に批判した、黒澤現代劇の最高峰と呼び声の高い名作。志村喬入魂の名演技。

【解説】

■ポイント



●志村喬(1905年～1982年)

- ・兵庫県出身。関西大学中退。近代座などの劇団を経て、昭和9年に新興キネマに入社。戦前は脇役として多くの時代劇に出演。
- ・戦後は黒澤作品の常連として21作品に出演。特に本作、「七人の侍」(1954年)等黒澤の代表作で主役を務めた。
- ・黒澤作品以外にも「ゴジラ」(1954年)「男はつらいよ」(1969年)等に出演。

●受賞・評価

- ・第26回キネマ旬報ベスト10:第1位
- ・文芸春秋・大アンケートによる日本映画ベスト150:第3位

■見どころ

●志村喬の鬼気迫る名演技

今であれば、日本アカデミー賞主演男優賞は確定。

特に、ラストの公園でブランコに乗り「ゴンドラの唄」を歌うシーンは映画史に残る名シーン

●「生きる」とは

永遠のテーマ